

Kunitachi
Debut
Concert
vol.9



2018

12/25

火

19:00 開演 (18:30 開場)

くにたち市民芸術小ホール
Kunitachi Community Arts Center

開催報告

プッチーニとヴェルディ

Luccini e Verdi

いぎな
オペラへの誘い

平成30年度文化庁「文化芸術創造活用創造拠点形成事業」

 Agency for Cultural Affairs,
Government of Japan



主催：(公財) くにたち文化・スポーツ振興財団 協力：国立音楽大学
後援：国立市 国立市教育委員会 イタリア文化会館 日伊櫻の会
助成：平成30年度文化庁「文化芸術創造拠点形成事業」

主催 公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団
Kunitachi Arts and sports Foundation

〒186-0003 東京都国立市富士見台2-48-1 くにたち市民芸術小ホール
TEL | 042-574-1515 EMAIL | shimazaki@kunitachibiennale.jp

SUMMARY



芸術が次世代に受け継がれていくための試み

平成 26 年 7 月に国立市と国立音楽大学との間で包括連携協定が締結されたことを踏まえ、(公財)くにたち文化・スポーツ振興財団では、芸術環境創造事業における学校連携事業に位置づけたプログラムを実施しています。

平成 30 年度においては、文化庁「平成 30 年度文化芸術創造拠点形成事業」に申請し採択されました。

さらに、この度の公演では、国立市が都市間交流を進めているルッカの生んだ巨匠、プッチーニの作品を取り上げることもあり、イタリア政府の機関であるイタリア文化会館や、国立市の桜をイタリアで育て、地方自治体に贈っている活動を行っている日伊櫻の会にもお力添えをいただくことができました。



この度のオペラの抜粋を集めたコンサートは、ひとりでも多くの方々に芸術の楽しさに触れていただき、また次世代に受け継がれていくような試みを試行錯誤しながら、様々なプロポーザルを取り入れた公演となりました。



オペラの愉しみをみつける入り口への誘い

目と耳を同時に楽しませる総合エンタテインメント、オペラの愉しみを見つける入り口に立ってほしいというねらいの下、

- (1) 一歩足を踏み入れた途端に現れる**非日常感**
- (2) 内容の**理解を助ける舞台演出**
- (3) オペラ**劇場の華やかさ**
- (4) つづきはぜひ**歌劇場で観てみたい**と思わせる仕掛け

を味わってもらうためにはどうしたら良いかの 4 点を主眼としました。



REPORT



非日常感の創出

芸術一般の主たる愉しみである**非日常感**の創出には、

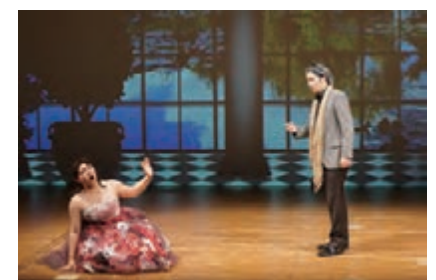
- 照明
- おもてなし感
- 意外性 の要素は欠かせません。

開場してから本ベルまでは客席は明るく、通常は、連れのいる観客は先ほどのまでの会話を続け、一人でやってきた観客は手持無沙汰にプログラムを読んだり、スマホでメールやSNSを眺めたり…と日常に浸かっています。いつもと同じ…という常識を覆し、**日常の連続性を遮断**して一步入った途端から、劇の中に入り込んだような演出をするために照明の工夫を専門スタッフと検討しました。

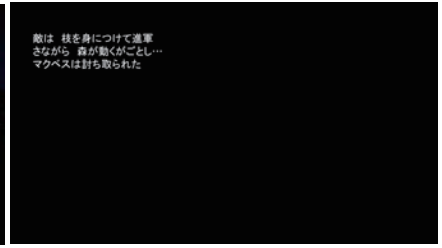
扉を入ると、LEDグラデーション照明が客席を照らし、パターンで変化するやや薄暗い照明、舞台は真っ暗、スクリーンには雪の降る映像にイタリア語でBuon Natale! のメッセージが映し出され、クリスマスというハレの日に劇場にきたことを意識できるようなかたちで迎えます。

予ベルと同時に、雪の中に日本語や世界各国の言葉でメリークリスマスの意味の語がテロップのように流れ、Buon Natale! の意味を暗示。やがて開演前の注意事項がアニメーションとともに映し出され、本ベルまでの5分は、スクリーンを観ることに観客が慣れていく時間に当てます。非日常のドラマは既に始まっているので、影アナは無し。

客席の照明については、「開演前に席でプログラムを読む」には、読みづらいことは想定内でしたが、歌の前後にスクリーンであらすじを出していくので、公演に関心を持てば、長い休憩中や帰宅後に必ずや読むと思われる。プログラムが読めることより、入口から**非日常へのワープ**を重視しています。



REPORT



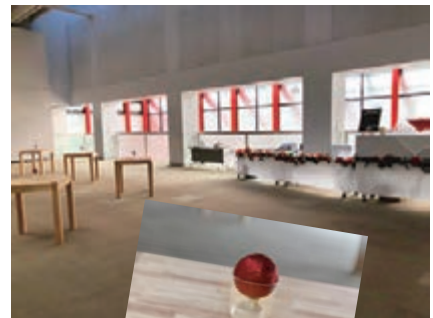
理解を助ける舞台演出と劇場の華やかさの創出

本ベルと共に、隙間風の風切音と教会の鐘が鳴り、クリスマスイブに始まった切ない若者の恋物語、ラ・ボエームの歌の場面までのあらすじが、降りしきる雪の映像にオーバーラップされます。

屋根裏部屋の窓からパリの景色がのぞく背景が変わると、ピアノの音が劇の始まりを告げ、舞台上に待機していた詩人口ドルフォにスポットが当たり、歌が始まる…というような展開で舞台は進行します。

リアルタイムで出る日本語字幕は、歌を理解する手助けとなり、歌が終わると暗転、小道具等の舞台転換の間に、この歌の後、物語がどうなったかを数行で示すことで、**歌の前後の脈絡を示し、物語の連続性を**試んでいます。

前半4曲はそれぞれの声の紹介となるアリア。動く背景と字幕、歌というスタイルに慣れたり、平日の夜公演のため、ギリギリにかけつけた観客を考慮すると、前半は短く25分ほどで終了し、一息つける休憩に入ります。後半は重唱を入れて、物語が対話形式の歌で進められる少し長いプログラムとなります。20分の休憩時には、キャンドルやクリスマスカラーを添えた設えのギャラリーを**歌劇場のホワイエ**に見立て、**スパークリングワイン**や**コーヒー**、**小菓子の無料サービス**を行いました。



各分野の専門家と共に創る公演

200名の来場者があり、アンケートのほぼすべてに最高の評価をいただいた公演になりました。それは卓越した技量をもつ新進音楽家の演奏があつてこそのもので。そして、より良い舞台を一緒に創っていくために、ピアニスト・歌手はもちろん、字幕制作者や、音響・照明の舞台スタッフなどそれぞれの知見から、意見を交わし変更したり、議論したりと緻密な作り方をしたことが、運営側、演奏者側、お客様の三者が納得できるものがつくられたのではないかと思います。

冬の日、心の琴線に触れるアリアの数々に思わずホロリとし、芝居仕立てのドラマチックな重唱に、心が踊りだす高揚感に身を委ねるうちに、あっという間に時間が経ち、帰路につく頃、ぜひ歌劇場でこの続きを観たい、聴きたいと思われたことを願っています。百万遍の解説より一遍の体験に勝るものはありません。

芸術の楽しみをみつける未来の観客が増えることこそ、芸術を次の時代につないでいくことの一助になるのではないのでしょうか。